

『ウィリアム・ポスターズの死』について

——開かれた世界を求めて——

植 木 利 彦

岡山理科大学教養部

(昭和60年9月26日 受理)

序

『ウィリアム・ポスターズの死』は、アラン・シリトーの長編三部作の第一作目であるが、明らかに「長距離走者の孤独」、『土曜の夜と日曜の朝』の延長線上にある作品である。「長距離走者の孤独」における主人公スミス少年は、幼い故に、彼が感じる社会の不条理に対して、ひたすら物理的な反抗を繰り返すことによって、その不満を表明した。¹⁾『土曜の夜と日曜の朝』では、スミス少年より少し年長者であるアーサーは、物理的な反抗から、不条理に満ちた社会の中にあっても、決してその不条理に染まることなく、認めることなく、精神的反抗を維持していく姿勢に転換した。²⁾『ドアの鍵』におけるブライアンは、労働者が虐げられているのは、彼等の無知と怠惰が原因であり、彼等には置かれた環境から脱出する意欲のないことを認識し、彼自身は逆に不条理に満ちた社会を利用して、虐げられた環境からの脱出を試みた。³⁾ 彼等三人より年長者である『ウィリアム・ポスターズの死』におけるフランク・ドウリーは、他の三人と比較すると、優れた職人としての腕を持ち、車も家庭もあり、何ら日常生活に対して不満もないように見えるのであるが、彼自身としては、ぬるま湯につかったような日常生活そのものに不満を抱いているのである。従って、彼のノッティンガムの脱出、そして放浪の旅は、彼の生きる目的を探し求める旅であり、彼は、旅の途中で出会う人々を通して、彼の不満の本質、生きる目的を見出すのである。

この小論では、彼が出会う人々との関係を通して、彼の不満の本質と、生きる目的とを明らかにしたい。

I

すでに12年の年月、工場労働者として働いてきたフランク・ドウリーは、自分の生活に対して常に説明しえない不満を抱いている。彼にはその不満の原因が何であるか明確には理解しえない。

After the landmarks of birth, school, work you get more handy with the girls. Then at eighteen you're called up, and so look forward to getting out. While you had something ahead of you it was fine. When you got out you went after the women, earned your money and drank your fill. This went on for a couple of years, then there was nothing left, just a fifty mile wall dead in front, starting from your shining shoes and going, as far as you could see, right up to the sky.⁴⁾

彼はこの彼を取り囲んでいるように感じられる壁から逃れる為に常に新しい環境を、新しい刺激を求めて今日に至っているのである。しかし5年を経た彼の結婚生活も、すでに彼にとっては目新しいものではなく、家と工場の間を機械的に彼を往復させる閉じられた小さな世界に変わりつつあるように感じられる。そこには彼を奮い立たせるような魅力も、輝かしい未来を期待させる光もない。彼は生きていくために、どうしても輝く未来が欲しい。'Death means nothing to me,'...,'because my future has been taken away. Yet I can't live without a future,...'⁵⁾ 彼はどんなに考えてみても、あがいてみても彼の住む世界の中に彼の未来となるべき光を見出せない。逆に今の生活を送っている限り、彼の行く末がいかなるものであるかを酒場に集まっている老人達の姿の中に見ることが出来るのである。'Christ, am I going to be like that in twenty years? Not if I know it. But maybe I don't know it. Not much I don't.'⁶⁾ 彼等は、いわゆる労働者としてその長い年月を工場で過ごし、常に生活に追われつつも、何とか生きていける生活に甘んじ、週末に酒場でビールを飲むことを唯一の楽しみとし、昔からちっとも変わる事のない生活を送ってきたのである。彼等にとっては、現状維持が平安であって、新しい変化を求める動きは不安を呼び起こすものなのである。従って彼等は、フランクが属していた組合の仲間が彼にした忠告通りに生きてきた人達なのである。

No politics, lads, and no religion. Just drink your pints and sling your darts, heads down for Bingo and look alive to win a fiver at the end. When you're off sick we'll look after you, lad, give you a bit of club money, like, and seaside booze-up once a year... Don't think... You're all free as long as you do as you're told.⁷⁾

自分の人生を押し殺し、何も考えずに、生きる屍のごとく、社会の檻の中でおとなしく生きているかぎり、少なくとも家庭に飼われる犬のような平安は手に入る。しかしその代償として、精神的自由と肉体的自由、個人の中に眠っている無限の可能性を放棄しなくてはならない。檻の世界は平安であっても、法や倫理、経済力を素材とした枠によって限られた世界であり、そこには限られた未来しか存在しない。彼はもっと広い無限の未来が欲

しいのだ。彼は英国という古い檻の世界を次のように考えている。

‘.... I look at all the people round me who have boxed their future up in the telly,.. The wide open spaces would frighten any dead bastard who didn’t like other people.... There’s nothing left to believe in in this country, nothing left, not a thing.’⁸⁾

この檻の世界で生きることを嫌う者は、当然野良犬のような生活を送らなくてはならない。檻の世界の平安を乱す者は常に迫害され、告訴されるのである。このような人物は英国の歴史の中で何人も存在したにもかかわらず、彼等は迫害され、告訴され、路地から路地へ人目を避けて逃げ回る運命を背負わされたのである。そうした人物の集大成がフランクの心の中に生きつづけるビル・ポスターズなのである。長い檻の中での平安な生活に慣れてしまった多くの人々の住む世界では、ポスターズの力は微力であり、しょせん彼の反抗が無為に終わることは目に見えている。それは負け犬の遠吠えであって、現実の社会を変革する何の効果もない。何の変化もおこらない社会には the conditions that made Bill Posters still persisted.⁹⁾ たとえフランクが英国での彼の人生に不満を持つ新たなビル・ポスターズになりえても、その行く末は夢のない苦い敗北だけである。家庭をも含めたすべての社会組織がその魅力を失って、単なる風雪を避ける形骸化した檻になっている以上、その檻が彼の夢を殺しているのである。彼は彼の未来を殺す世界では生きてはいけない。

では、新しい希望に満ちた生き方とはいかなるものであるか？ そんなことは何年かけて考えても意味はない。It was impossible to do anything while thinking about it.¹⁰⁾ 考える以前に、先ず彼を閉じこめている檻から脱出しなくてはならない。彼の家庭と仕事の放棄は彼の精神的、肉体的自由を奪っていた目に見えない絆を切断したことを意味する。

II

夫を捨て、子供と別れて一人で生きているパット・シプリーは、フランクと同じように家庭という檻の中で自分を殺して生きることのできなかつた人間である。沢山の本に囲まれ、看護婦という仕事を持ち、一人で自由に生きている彼女は、フランクにとっては正に自を生きている手本のような人物として目に映ったことだろう。彼女にとって看護婦という仕事は、彼女の能力と特殊な技能を発揮し、彼女の社会に対する有益性を認識しえる場なのである。彼女は自分の仕事に誇りこそめて、自らが社会によって搾取されているといったフランクのような労働者階級的な意識はない。She grew to believe that work was the most important thing in one’s life.¹¹⁾ Her work—to her—was better because it was rewarding in another way.¹²⁾ それは彼女が特別な知識と技能を社会に売っ

ている専門家であり、フランクのような労働力を資本家に売るといよりも、買われている人間との差異によるものである。この差異は、とりもなおさず、教育という要因から生じたものである。更に煎詰めれば、教育を受けられる環境で育った人間と、そうでなかった人間との差である。教育を受けられる階級に属する者にとっては、この社会は生きていくのに都合良くできた社会と見えるのである。‘Everyone does the job they’re fit for. The natural order of things works pretty well.’¹³⁾ 中産階級に属するパットには、自らの人生が生きられる現実社会に対して特に強い不満はない。否、英国という社会は、長い歴史の中で彼等、中産階級、の手で彼等に都合のいいように造りあげられてきたのである。それは彼等の世界であって、彼等が生きていくために絶対に必要な世界なのである。

パットは、家庭という絆を断ち切って、自由に生きていると思ったのはフランクの考え違いである。彼女は個人をがんじがらみにしている社会の既成概念をすっぱり捨てて、自由に生きているのではない。彼女はキースとの結婚生活に価値を見出せなかつただけであり、彼女の人間性、あるいは社会に対する有益性を発揮しうる意義ある結婚生活そのものを否定するものではない。彼女の行動の動機は単にキースとの結婚生活に対する不満であって、彼女の属する世界そのものに対する不満ではない。従って、彼女はフランクのように彼女の属する世界そのものを捨てる勇気も、彼女の仕事も、ましてや息子のケヴィンを捨てる気もない。特に、息子、ケヴィン、に対する強い愛は、パットを元の世界につれ戻したところから見れば、そこにパットの世界の限界がある。彼女は飽くまで彼女の属する世界の中で彼女の人間的独立と有益性を要求していたのである。何故なら、彼女はフランクの知性と知識を認めながらも、フランクが口論の行き詰まりに見せる暴力に強い嫌悪感を示すのである。彼女の属する世界では、ものごとは常に論理によって解決が計られ、暴力は無知と野蛮の産物であった。フランクの属する世界では、ものごとの決着は力によってつけられるのである。つまり、力が正義なのである。パットは、この力の支配する世界に直面する時、フランクの世界は彼女の生きていける世界でないことを思い知らされている。

He had power over her, and she wasn’t used to it That blow had taken her power, upset the balance, destroyed her independence. She saw it in simple terms: either it was true or, if she was exaggerating, her character was flawed.¹⁴⁾

一方、ノッティンガムの世界を捨て、漂流する船の如くさまよい歩いても、フランクの心身にこびりついた労働者の意識と雰囲気は消え去るものではない。‘You mean he smelt fifteen years of overall on my back!’¹⁵⁾ No matter how extended Dawley’s forays into alien territory, both at home and abroad, his working-

class background is a constant companion.¹⁶⁾ フランクの眼から見れば、シプリー夫妻によって代表される中産階級は、労働者階級の世界を理解しようとしなければ、ましてやそのような者の世界で住むことなど夢にも思わないのである。彼等、中産階級の者は、この社会を支配する側、いうなれば、家主であって、労働者階級を、その家の庭の片すみに住まわせてやっている飼い犬程度にしか考えていないのである。中産階級の者にとっては、労働者階級は彼等が豊かな生活をいとむための必要悪程度の価値しかないのである。にもかかわらず、教育を受けていない無知な労働者階級は、そのような現実気づかず、置かれた環境に甘んじているのである。

‘....The world’s top heavy with you and your sort who wank people’s brains off every night with telly advertisements that make them happy at carrying slugs like you on their backs...’¹⁷⁾

この社会は彼等の社会であって、社会の人口比率の大部分を占める労働者階級のための社会ではない。両者の間には、相互理解の余地はなく、憎悪と侮蔑、敵意そして支配する者と、支配される者とを区別する歴然とした目に見えぬ壁が存在するだけなのである。

パットがフランクの世界で生きることができなければ、フランクがパットの世界で生きることができない。一見似通った二人であっても、パットは限られた、静かな、安全な湖の中で自由に走り回ることを願う船であり、フランクは湖にはんの一瞬接する荒々しい流れに乗って、果しない無限の海に向かって進んでいく船であれば、両者が共に航海することは不可能なのである。

Gone, in spite of her so-called love, run away at the first sound of pain and responsibility, ultimately frightened at the back of her fine face and behind her strong front against life.¹⁸⁾

フランクは、この社会は中産階級の者達の社会であって、絶対に彼の生きることのできない社会であることを、パットとの関係から、痛感したのである。

III

パットと同じ村に住む画家のアルバート・ハンドレーは、社会のあらゆる価値観、既成概念を本能的に嫌っている人間である。彼の既存の概念の否定は、その絵、「リンカーンシャーの密猟者としてのキリスト」に象徴的に表現されている。それは、我々がよく見かける十字架にかけられ、目を閉じ、頭をうなだれ、多くの信者に畏敬の眼差しであがめられている哀れなキリスト像ではない。アルバートのキリスト像は、毅然と頭をもたげ、目を輝かせ、十字架の下には彼を崇める信者ではなく、多くの動物の死骸が横たわっている。全く既存のキリスト像とは異なるこの構図は、一般的な社会概念に対する挑戦である。彼のキ

リストは、固定した宗教理念という枠の中に人々を導くものでもなく、彼を十字架にかけた権力の前に頭をうなだれ、屈服するものではない。彼のキリストは、人々に愛され受け入れられるキリストではなく、逆に蔑まれ、罵倒されることを望んでいるのであり、更に執拗にこの世界に挑みかかろうとするアルバート自身の黒い情熱なのである。

The face held, looked as if wanting a drink from the vague line of sea behind, aching to eat what landscape nine-tenths surrounded it, taste both before rabbits or foxes got there first. It wanted the world pushing into its mouth, to digest it and shit it out.¹⁹⁾

アルバートは、この世界の価値観、倫理観といった既存の概念に襲いかかり、それらを侮蔑し、引き裂き、殺し、破棄したいのであるが、彼は、彼のキリストと同じように社会によって手足を縛られ、ひたすら胸の内にその願望の黒い炎を燃やしつづけているのである。彼の、絵の展覧会場や、レストランでの傍若無人の振る舞いや悪口雑言は、陳腐な価値観に対する実際的な否定の行動である。更に彼の家庭を構成している各人の奇妙きてれつな振る舞いは、古い家庭意識の拒否であると同時に、最も原始的ではあるが、各々の自由意志に基いて行動している動物の群に近い共同体の一員としての行動である。

絵を通じて、人間の、社会の赤裸々な本質に迫ろうとするアルバートの激しい姿勢はフランクの共感を得るのは当然のことである。彼はフランクが目にした真に魂の生を生きている人間である。彼は社会の内であって、社会を侮蔑し、罵倒する反抗心を絵画の生命力として生きている。従ってこの社会を離れることは彼の画家としての生命力を失ってしまうことになる。彼の黒い情熱を燃やしつづけるためには、彼にはこの世界が必要なのであり、社会もまた実質的には無害のこの有能な画家を彼等の文化、教養に寄与する者として快く受け入れる。アルバートは、いうならば、無害の故に迫害され、告訴されることもなく世に受け入れられたウィリアム・ポスターズであるといえる。

フランクはアルバートの中にもう一人のウィリアム・ポスターズを見たが、ウィリアム・ポスターは、しょせん、社会に不満を持ち、たえず腹を立ててはいても、負け犬の運命を背負っており、社会そのものの組織を変える力はない。フランクは、そうしたウィリアム・ポスターズに心情的に同情はしえても、そこに輝く未来を見出せるわけではない。彼はもっと他の新たな生き方を探さなくてはならない。

IV

典型的な中産階級のインテリである測量技士ジョージ・バシングフィールドの妻マイラは常に次のような理想を抱いていた。 Her ideal had once been to work in some newly relinquished colony, teaching economics or social relations, helping to

form a new nation from the top-heavy powergrid of exploitation, or rescue it from the threat of black dictatorship.²⁰⁾ 彼女はジョージと結婚する時にも、彼女の母親のいう社会の規律、秩序、常識、宗教などに囚われることなく、飽くまでも彼女自身の自由意志に従って、彼女自身の結婚を決めたのである。彼女は根っから独立自尊の自由人であった。しかし現実の結婚生活では、彼女の夫に対する愛情からジョージの求める理想的な女性に自分を合わせようと努力し、平和な家庭づくりに勤しんでいる。しかし彼等の家庭の平和は、インテリである彼等二人の無口と内気、そしてお互いに対する遠慮の気持がその支えとなっている。従って、if silence and shyness ever broke they would have become different people in each other's sight and fled apart.²¹⁾

ジョージは彼の理想の家庭という夢を実現させるために彼女の夢を呑みこみ、彼女の生を殺しているのである。無口で内気な彼女が真に彼女自身の生を生きるには、彼女に彼女の現実の生の無意味さを認識させ、かつての自由人に彼女をもどらせる大きな力が外から働きかけなくてはならない。何故なら You lived what you lived and couldn't change it by one act. Only an outside force over which you had no control - unexpected, huge, enthralling - could do that.²²⁾ 彼女にとってその外的な大きな力がフランクであった。彼は心の中にぽっかりとあいた空虚、心の中の死、を強く意識し、その空虚を埋める未来を求めて旅に出た。その空虚は何によって作り出されるのか？彼は考える。人間の心の中には怠情、締め、個人的な愛情による自己犠牲といった心の中にはびこるネズミが人間の魂を次第に食いつくすのだと。 A man's body is a battlefield of rat and anti-rat—the rat to kill, and the other to keep him human.²³⁾ このネズミこそ人間の魂の病である。ネズミをはびこらせば、魂は死ぬのであるが、この病は長い人間の歴史の中で、絶えることなく生きつづけている。限られた世界の中で、精神的にも肉体的にも澱んだ沼のようになるのは本人の怠惰や締めの成せる業であり、真に生きようと思う者は常に流れる河のごとく、自由な精神的活動、自由な行動をすることが第一条件となる。目下、生きる目的を見出せないフランクには、動くことのみが生きている証拠であり、動きながら考えなくてはならない。彼はノッティンガムにいた頃の自分と同じような境遇にいるマイラに対し次のようにいう。 You could do exactly what your heart and soul wanted to do, if you had the courage and endurance to face the lifelessness it left in you.²⁴⁾ マイラの心の中の空虚は正しく、フランクの指摘するジョージとの結婚生活における彼女自身の自己犠牲から生じたものである。自己犠牲とは本人の生を殺し、他人の生を生きることであり、そこから本人の幸せは生まれてこない。

'Why should anybody be happy when they're married?' he said.

'That's a load o' rammel. Even living together, it's not realistic

to expect happiness. I used to think it was necessary, even possible, but as soon as two people start thinking about happiness then they're finished. If only one of them thinks about it, it blows up even quicker.'²⁵⁾

真に燃えるような生を生きるには、既成概念にとらわれず、何事にも妥協せず、自己犠牲を強いられず、常に変化する新しい世界で新たな目的のために生きなくてはならないとするフランクの夢を実現させるには、英国という古い、何もかもが秩序や規律、道徳や倫理を材料として、歴史の接着剤でぴったりと固められた国の中では不可能である。新しい生き方を見つけようにも、すべての道はすでに舗装され、標識に従って既製の道の上を歩く以外に手はない。新しい生を生きるなら、新しい国でなくてはならない。フランクの英国からの脱出は、古い世界、古い彼自身を捨て、無の状態から、受動ではなく、能動的な立場から自分自身の生きる道を見出せるかどうかの「生きるか死ぬかの問題」であった。彼はこのような状態にある自分のことを次のように感じている。

I've swum out something but I've not swum into anything else. It's impossible to in England, if you're true to yourself, unless the whole way of life changes through some political switch. I'm nowhere yet....'²⁶⁾

フランクが、空虚な心を満たすために入ってしまったアフリカの空虚な世界は古い文明社会とは無縁の世界である。その世界は初めて人間がこの地上に現われた時、人間に自由に行動し、考えることを許した世界と同じ世界である。マイラは、この世界に足を踏み入れた時、彼女とフランクの関係が、自然の法則だけが支配する遠い原始の世界の雌雄の関係に戻ろうとしていることを強く意識している。

She had had this feeling ,... , that the train was taking her to a stage beyond both George and Frank, not, out of Frank's love so much as into her own self where life would be lonelier and yet more solid, frightening, exhilarating, and independent.'²⁷⁾

そこは自然を相手に精一杯生きていく野生の世界であり、生殖という行為の間だけ雄と雌がつかい、その後は元のそれぞれの世界に戻っていく厳しい世界であり、愛情も生存の大きな要因とはなりえない世界である。この世界では、愛は個人のためにはあってはならない。愛し合う二人の人間が愛によって互の行動や考え方を拘束しあうことは古い文明世界と変わりはない。新しい世界では全ての人間が自由に行動し、生きなくてはならない。重身のマイラがたとえフランクを愛していても、それ故に彼の行動を拘束してはならないし、フランクも小さな愛に捕われてはならない。出産をひかえて、動けぬ彼女は彼女一人の生を

生きることが小さな愛から彼を解放し、より大きな愛で彼を包むことになる。 Love is cosmic, real love coming when you spurn the need for it. Love then released goes out to everyone else.²⁸⁾

愛は個人にむけられた、あるいは個人の自由な思考と行動を縛る小さな愛であってはいけない。愛は個人の思考と行動の自由を許し、かつ多くの人々にむけられる大きな愛でなくてはならない。いいかえれば、多くの人々にむけられた愛のもとで、個人の思考と行動の自由を許すような生き方こそ最も理想的な生き方といえるのである。 'There's no such thing as happiness except when you are doing work for yourself that at the same time is helping other people.'²⁹⁾ 彼はそのような生き方をFLNの武器輸送の仕事に見出したのである。それは、彼の行動が単に私的な行動ではなく、砂漠の無の世界から新たな世界をつくり出そうとする人々の助けとなる行動であるからである。FLNの戦う砂漠の世界は、法も秩序も存在しないゲリラの世界である。苦しむ多くの人々への愛から、その人々を救うためにゲリラの世界で自由に考え、行動することこそ彼の夢見た世界ではなかったか？

It's not much perhaps, but it means everything to me. I used to dream of being able to *something*, but I'm not doing anything. I see that now. I'm just being myself. I've learned to be myself.³⁰⁾

無の世界。個人の自由な思考も行動も拘束しない世界。個人の無限の可能性を発揮しうる世界。個人の行動によってのみ開かれる無限の可能性を秘めた世界。その世界の中で、フランクは、古い自我を捨て無となった彼自身から新しい彼の自我を育成するのである。

Frank felt that the desert was the only place where he would find something. People might say he'd had everything: job, wife, children. What more was there? He wanted to go into the desert. Only in the desert did one learn. He had learned all that there was to learn outside the desert. Something in him was going to be reconstituted, and he, by his own effort and actions, had put himself into the position to achieve it. His life had to be filled from the fountains of his own desert, the cruel ash of his own heart.³¹⁾

結 語

フランク・ドウリーの不満は、秩序、規律、道徳等の人間が人為的に作りだした人間の自由な行動、思考を妨げる壁に取り囲まれた世界の中に閉じ込められている窮屈さから生じたものである。彼がこの世界の中で、自由な行動、思考を試みようとも、それは確立

れた世界の秩序、規律、道徳を乱し、犯すものであり、また、そうした世界に忍従し、あきらめている者達の平安を乱すものであるが故に、その世界から迫害され、告発を受けることになる。シリトーの初期の作品群の主人公達は、社会からの迫害を受けながらも、彼等の自由を求めて社会に反抗したのであったが、確立された社会の中での一個人の反抗は余りにも微力で、その確固たる世界を揺り動かせるものではなく、しょせんは負け犬となって社会から葬り去られることになる。

自由な行動と思考を求める者は、そのような行動と思考を許しえる自由な世界を求めなくてはならない。自由な世界は、確立された世界の中で、ただじっと考え、憧れていも手に入るものではない。新しいものを求めるには、その願望を行動に移す必要がある。行動が思考に優先しなくてはならない。何故なら思考は行動を抑制し、行動や行為に意味を付与し、秩序や規律、道徳等を生み出すのである。思考は、人間が危険な状態に陥るのを防ぐ安全弁となりえても、人間を解放する源動力とはなりえない。

自由な世界での人間の行動は、野性動物のそれと同じで、本能と根元的な願望によっておこされるものである。その世界には、人間の行動を規制する人為的なものは何一つとして働らく余地はない。すべての者が真に本人の意志と本能の命ずるままに行動しえるのである。だが人間は単なる野性動物ではない。単に自由に行動し、考えているだけでは、放浪中のフランクと同じ虚しい気持に襲われることになる。人間の行動、思考は、常に自由であると同時に多くの人々の為になる行動であり、思考でなくてはならない。これがフランクの見出した彼の生きる目的であった。彼はそうした生き方を無の砂漠の中から新しい国家を生み出そうとするアルジェリアのFLNの活動の中に見た。彼はFLNに参加することによって行動を通しての生き方を実際に試してみることになるが、彼が、行動を通して、生を何如に認識するかは次作『燃える樹』を読まなければならない。

Notes

1. 植木利彦「長距離走者の孤独」について 岡山理科大学紀要第18号B 1982年参照
2. 植木利彦『土曜の夜と日曜の朝』 PERSICA (岡山英文学会 No.11 1984年) 参照
3. 植木利彦『ドアの鍵』について 岡山理科大学紀要第20号B 1984年参照
4. Alan Sillitoe, *The Death of William Posters*. (London: W.H. Allen. 1979) p.36
5. *Ibid.*, p. 56
6. *Ibid.*, p. 75
7. *Ibid.*, p. 73
8. *Ibid.*, p. 54
9. *Ibid.*, p. 16
10. *Ibid.*, p. 21
11. *Ibid.*, p. 28

12. *Ibid.*, p. 28
13. *Ibid.*, p. 44
14. *Ibid.*, p. 131
15. *Ibid.*, p. 66
16. Stanley S. Atherton, *A Critical Assessment* (London: W.H. Allen, 1979) p. 162
17. Alan Sillitoe, *op. cit.*, p. 146
18. *Ibid.*, p. 149
19. *Ibid.*, p. 119
20. *Ibid.*, p. 169
21. *Ibid.*, p. 161
22. *Ibid.*, p. 170
23. *Ibid.*, p. 221
24. *Ibid.*, p. 193
25. *Ibid.*, p. 195
26. *Ibid.*, p. 238
27. *Ibid.*, p. 264
28. *Ibid.*, p. 256
29. *Ibid.*, p. 286
30. *Ibid.*, pp.. 293-4
31. *Ibid.*, p. 318

On The Death of William Posters

Toshihiko UEKI

*Department of General Education,
Okayama University of Science
Ridai-cho1 -1 , Okayama 700 , JAPAN*

(Received september 26, 1985)

The odyssey of Frank Dawley is a pilgrimage to find out the way to live. Through the people with whom he was closely connected on his way to the pilgrimage, he realizes the true nature of his dissatisfaction with his life and the present society which restricts man to act and think freely. He thinks the present society is for the middleclass, and, leaving this society, finds out the new way to live in the open world where there is no restriction on man to act and think as he likes.

In this paper we want to follow the process through which he finds out this open world.